

演題番号:5

テーマ 3:女性とこどもの健康

東ウガンダにおける10代の意図しない妊娠の実態と背景

駒澤 牧子^{1,2}、佐藤 美穂³、Moses Kyangwa⁴、Pau Kitakule⁴、齋藤 聖子¹、牧本 小枝¹、
湯浅 資之²

¹ 国際協力機構緒方貞子平和開発研究所

² 順天堂大学大学院医学系研究科グローバルヘルスリサーチ

³ 長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科

⁴ ブソガヘルスフォーラム

【目的】 低中所得国において思春期の意図しない妊娠が公衆衛生上の大きな課題であることは、国際社会が認識しているが、これまで抜本的な対策は取られてこなかった。ウガンダにおいても過去20年10代の意図しない妊娠数は高止まりしており、その結果、妊産婦死亡の17%が10代の少女で占められている。本報告は、ウガンダにおいても10代の意図しない妊娠数が多い東ウガンダ地域を対象に、介入研究を始めるための準備調査の結果である。

【方法】 2023年5月、東ウガンダの2県を視察、データ収集、フォーカスグループディスカッション(FGD)を実施し、10代の性行動と避妊、携帯電話活用状況について情報収集した。

【結果】 現在のリプロダクティブヘルス(RH)分野のサービス提供状況は、例えばイガンガ県のNGO・RHウガンダが運営するYouth Center(対象10-24歳)では週30名程度の利用に留まり、その他の啓発活動も低調であった。保健省は県病院にAdolescent cornerの設置を推奨しているが若者にとって魅力的とはいえない。イガンガ県病院では妊産婦ケア科において、週2回10代の妊婦の日を設けていた。同病院家族計画科の月例統計は、15歳未満、15-19歳の区分がある(例えば2023年4月実績では、15歳未満は0であるが、15-19歳では5年有効インプラント6名、IUD2名、注射法1名)。FGD(未婚男子6名、女子9名参加)の主な結果は以下の通り。①10代の性行動:男子5名、女子7名にパートナーがおり、うち女子1名のみ性交を経験していない。男子1名はガールフレンドを妊娠・中絶させた経験がある。②避妊の実践:ボーイフレンドがいる女子7名のうち、5名が避妊具(5年有効注射法4名、コンドーム1名)を使用。1名以外は、入手先は保健センターであった。男子の間で避妊知識習得欲が高い。③携帯電話へのアクセス:16歳以上のほとんどが携帯電話を所有しており、主に金銭の送受金のためにモバイル店を1日に1回以上利用していた。両親はこれらの状況をほとんど認識していない模様。モバイル店の視察で、2つの市の中心部では300mの街区に約5~6店舗あり、店員の男女比は半々、約3分の2は10代後半から20代後半であり、店によって顧客層が異なる様子が把握された。

【結論】 対象地域の都市部において10代の意図しない妊娠のリスクは高く、安全な避妊の推進が喫緊の課題である。若者と親和性の高いモバイル店を入り口としたアプローチの開発は意義があることが示唆された。